

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	南国市立十市小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	子どもから地域・行政へ広げる防災意識 ～地震津波から生き抜くたくましい子どもを育む～

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 活動に至る経緯

昨年度に引き続き防災学習の最終目標は、自分たちが学んだ防災についての知識や考え方を地域の人々に伝える「十市防災フェスティバル」の実施とした。昨年度は企業と連携して様々な活動を行ったが、今年度は地域に伝えるだけでなく、自分たちの要望を行政に伝え、町を変えるために子ども達が動く総合的な学習の時間を設定することとした。そのために、6年生だけでなく全学年で防災フェスティバルに参加することとした。

2. 活動・研究の目的（ねらい）

- ・学校での実践がメディアにて広く報道されることにより、地域の防災意識を高める。
- ・行政への提案を通じて、地域全体の防災に対する意欲を高めるとともに、一人一人が自分の町を守るためにできることを考えるきっかけを作る。

3. 活動内容

①新たな試みを取り入れた避難訓練

昨年度同様、年に10回の避難訓練を行った。基本的な行動は身についたため、いつもの訓練と違う状況で避難訓練を行った。

(1) 雨天時の避難訓練

これまでは児童の健康や安全に配慮して雨天時の避難訓練は延期としていたが、雨天時の避難はどんな困難があるのか体験するために実施に踏み込んだ。小雨ではあったが道が滑ることや周囲の雑音が多く指示が聞こえづらい事、体力の消耗など想像以上の体験ができた。

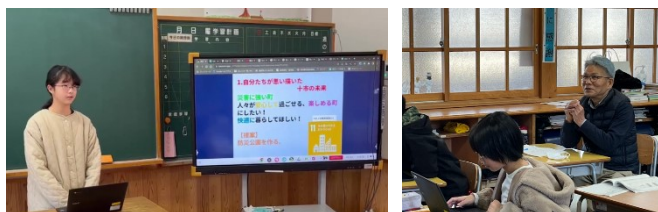
(2) 教員対象の抜き打ち避難訓練

児童だけでなく教員にも予告なしで避難訓練を行った。二次避難までの経路や状況を把握したうえで臨機応変な対応ができるかどうかを試す目的があった。児童は何度も抜き打ちを経験しているので慌てず行動できたが、教員はとっさの判断を知られることでいつもの役割分担ができなかったり専科の教員がクラスの児童を先導することでいつもと勝手が違って混乱したりと見直すべき反省があり、命を守るための有意義な訓練ができた。

②行政への発信

(1) 地域議員への提言

国語科「町の幸福論」で十市の未来について防災の視点で考えたことを十市地区の土居恒夫議員に発表した。高知市内にある防災公園や、宮城県岩沼市との姉妹都市交流に参加した児童の経験談、本やインターネットで調べた地域の共助意識を高める取組など、総合的な学習の時間での学びを伝えた。



土居恒夫議員へ提言している様子

	テーマ	取り上げた事例
1班	災害に強い街 人々が安心して過ごせる街	高知県高知市「弥右衛門公園」
2班	「災害が起きても大丈夫！」と市民全員が言える街	秋田県にかほ市「象潟小学校」
3班	防災意識の高い人が移住してくる街	青森県「キックオフイベント」

土居氏は、「災害に強い街を創るためには地域の協力だけでなく一人一人が自分事として考えていくことが大切だ」と話をしてくれた。議会でも子ども達の発言を発信して下さり、地域防災に一石投じることができた。

(2) 「防災フェスティバル」の開催

今年度も企画運営をすべて子ども達だけで行うようにできた。地域の人に伝えたい内容を分類し、体験活動を通して何を知ってもらいたいのか明確にし、グループに分かれてブースを作った。また今年度は下級生も様々な形で参加した。

グループ名	取組・目的（願い）
炊き出しチーム	地域の農家さんにも声をかけ、提供していただいた野菜でうどんを作り、食べてもらう。いざというときにみんなで持ち寄ったもので炊き出しができるような雰囲気をつくりたい。
防災知識チーム	市役所の危機管理課野村さん、香川大学の金田教授から学んだ南海トラフ地震に関する知識や地域の被害想定を地域の方にクイズ形式で伝える。
避難所チーム	夜の避難所を再現し、避難所で1人あたりに与えられる3平方メートルの生活スペースをつくり体験してもらう。
防災倉庫チーム	阿戸地区の防災倉庫を見学した時を思い出して、倉庫内に合ったものを再現し、使い方や使う場面を伝える。
防災グッズチーム	使用者の年齢や生活様式、性別などに視点を置き、被災時に避難所生活になった時使えると考えた便利グッズを紹介・体験してもらう。
防災リュックチーム	防災リュックの必要性を訴える。〇×質問形式で答えてもらい、自分の防災力が難点なのか診断して危機感を持ってもらう。
起震車チーム	大地震の揺れを体験してもらう。また、待ち時間に簡単な防災クイズを出して防災知識を紹介したり、学んだことをまとめたリーフレットを配布したりする。
マット揺れ体験チーム	マットに乗ってもらい、人工で揺らす。ダンゴムシ、ピラミッド、カエルポーズをとってもらい、揺れに対応できるポーズはどれか体験し、それぞれの身を守るポーズのよさを考えてもらう。
ガラス踏み体験チーム	ペットボトルのキャップを強化ガラスに見立てて、新聞紙スリッパを履いた時と履いていない時でどれくらい違うかを体験してもらう。新聞紙スリッパの作り方を教える。
ランタンチーム	姉妹都市交流で教えてもらったLEDとボタン電池で明かりが作れることを紹介・体験してもらう。
1年生	牛乳パックでつくったお皿の展示。
2年生	6年生と一緒に新聞紙スリッパを作る。
3年生	フィールドワークした時の学習成果をパネルで発表
4年生	地域にある避難場所の清掃活動を実施
5年生	段ボールを用いた自作の避難所を展示・発表



3月4日付 高知新聞記事



市長が参加し、お話をいただきました。

2日間合わせてのべ600人以上の来場者を迎え、学習の成果を発表することができた。1日目には南国市長を招待し、各ブースを回ってもらい、1年間の学びを伝える事ができた。市長には、フェスティバルのにぎわいや子ども達の発表を通して、十市地区の防災活動をアピールすることができたと思っている。土居氏への提言も併せて行政に対して自分たちの考えや要望を十分に伝える事ができたと言える。



3. 成果と課題

本年度の活動を通して、昨年度よりも防災学習が全校生徒や地域住民の防災力向上につながったという手ごたえを感じている。また、土居議員や市長への提言により、議会でも地域の防災についてより具体的な議論をしてもらう事ができれば、良い啓発になったと言える。今年で3回目の十市防災フェスティバルも1年間の防災学習のまとめとして定着し、十市小学校の伝統としてこれからも受け継がれていくだけの素地を築くことができた。

課題として、高齢者の参加が少ないことが挙げられた。海沿いの地域には1人暮らしの高齢者も多く学校とのかかわりもない人々が多い。1人でもたくさんの人の命を守るためにもこれまで参加したことのない人々への呼びかけや参加してもらえる方法をこれまで築き上げてきた人脈を生かしていきたい。